



「森の夜」2024年 46.5×38.8cm



「ウルシ」2025年 6号F

PREVIEW

長澤耕平 日本画展 —夜の森へ—

12月24日(水)～12月29日(月)※最終日午後4時閉場
岡山天満屋 5階 美術ギャラリー
岡山市北区表町2-1-1 ☎ 086(231)7523(直通)



「枯枝、落ち葉、陶片、古びた釘」2025年 3号S

長澤耕平の絵には道端に茂る草花や現代都市の風景がたびたび登場していく。様々な事物が息づいている大きな「世界」の存在を仄めかすように、地平線と水平線の先には永遠に人と自然の暮らしが続いていることを感じさせるように、どこか遠くを見遣る視線が画面に色濃く込められていた。

個別特殊に存在する事物とその背後に蠢く世界の図と地の関係が、長澤の表現を突き動かす原動力だ。世界の方をまっすぐに見つめる表現がこれまでの作品だとすれば、今回の個展で披露される作品は事物の方へ接近する表現と言えそうだ。

アントニオ・カルロス・ジョビンのヒット曲「三月の水」の歌詞の一部を、「ほとんど名詞の反復で構成されるこの詩はアニミズム的な事物のきらめきに満ちて」と長澤は評する。個々の事物を指し示す名詞の連なりは、互いに連結し合う関係性の暗喩であり、認識の拡大ですらある。事物を通して世界を想像することと、世界があるから個々の事物が名を持つことは分かちがたい。

「たったひとつの小石でも、良く捉えることができたならば、その反転として世界全体を捉えることともなり得るのです」という長澤の言葉には、無垢な喜びが満ち溢れている。